「慈悲とは～世のひとびとをいのる」

●「迷い犬」と「埋葬先不明」

もう、40年も前の春、迷い犬を飼い主に届けるお手伝いをしたことがありました。

その日、住宅街を歩いていると電柱に「迷い犬」のポスターが、写真入りで連絡先とともに貼ってあることに気づきました。同じ日の午後、近くの住宅街で、「迷い犬」を預かっていますという貼り紙をたまたま見つけ、結果として、その「迷い犬」は飼い主に戻りました。

次に最近の経験です。お寺にいると、思いもよらないお尋ねを受けることがあります。その人は、事情があって、親族と音信が取れなかったけれども、亡くなっていることが分かり、その埋葬先を探すため、亡き方が住んでおられた周辺にある多数の寺院に、埋葬の記録を尋ねるお便りを出され、その一通が私の寺にも届きました。

調べてみても、うちの記録にはありませんでしたので、その旨を手紙に書き、「埋葬先を探そうとされた、その志は、貴方自身を支え、生きていく上で大切な営みとなるでしょう」と讃えました。

●三種の慈悲

仏教では、相手に対するあわれみ慈しみの慈悲を小悲(しょうひ)・中悲(ちゅうひ)・大悲(だいひ)の三種に分けて説いています。

小悲は、衆生縁の慈悲ともいい、苦悩の衆生を縁として生まれる慈悲です。その人に、仏教との出会いや目覚めがなくても成立します。「迷い犬」をめぐって生まれた世間人情のレベルの思いや行いと重なります。

中悲は、法縁の慈悲ともいい、仏教の教え（法）を縁として生まれる慈悲です。教えに出会うと、自分の姿に気づいて、道理にかなった生き方で相手に関わろうとします。「埋葬先不明」となった方をめぐって生まれた思いや行いです。しかし、小悲・中悲ともに限界があります。

大悲とは、無縁の慈悲といい、縁の無かったものに対して生まれる仏の慈悲です。仏の智慧は、あらゆるものに働きかける慈悲が生まれるというのです。

かつて、お釈迦さまは、自分に背き、自分を傷つけようとした、従兄弟、悪逆のダイバダッタに対しても慈悲をもって接したといわれます。まさに、縁無き者、仏に背く者に対する慈悲、それを大悲といいます。

●如来大悲

親鸞聖人は、ご門弟に宛てたお手紙に、「念仏そしらんひとびと、この世(よ)、のちの世(よ)までのことを、いのりあはせたまふべく候ふ。（略）ただひがうたる世のひとびとをいのり、弥陀の御(おん)ちかひにいれとおぼしめしあはば、仏(ぶつ)の御恩(ごおん)を報じまゐらせたまふになり候ふべし。」（第四十三通八〇八頁）とお示しです。

（意訳：念仏を謗る人々のこの世から後の世までの幸せをいのっていただきたいと思います。（略）ただ誤った考えにとらわれ（念仏を弾圧す）る世間の人々の幸せをいのり、阿弥陀仏の本願に導こうとお思い合いになるのなら、それは仏のご恩に報いられることになると思われます。）

念仏を非難し、仏法に背く人々の姿を他人ごとではなく、かつて仏縁の無かった人たちもそうであったように、これから仏縁を恵まれる可能性のある人々だと受けとめている親鸞聖人のお心もちや接し方がうかがえます。

私たちは個人のレベルから、国のレベルまで、自分の感情や都合で、憎しみ合い、恨み合っています。しかし、改めて現代社会において慈悲を考える時、「ひごうたる世のひとびとをいのる」というご教示に向き合うことの大切を感じました。

ところで、阿弥陀「如来」の慈悲を「大悲」と受けとめられたということは、ご自分の中に、仏の心に背いていこうとする姿を深く深く見出されたということでもあったのかと、改めて聖人の尊い生き方に教えられるばかりです。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「自分とは～仏さまの尺度（ものさし）」

●自分とはなんだろう

分析心理学者の河合隼雄（はやお）先生の『中年クライシス』（朝日文芸文庫、1996年）を読みなおしました。

「人間は、中年になるとあらてめて自分とは何者かと目を向ける。
若い時にも、望みを求め、やりたい職業、結婚したい相手を見つけ、自己を確立させていく。
ある程度成功して、その時、自分とは何かと考える時、これが自分だと支えてくれるものを、社会的地位や、年収や財産などという尺度に見出すことができる。
自分は○○会社の課長だ、と思う時、その会社に対する社会的評価や、職責としての課長という価値に支えられ、自分はたいしたもんだ、と感じる。
これらの評価は、他人と比較が簡単で、例えば、年収ならば、住む場所も職業も問わず順番がキッチリとつく便利さ、分かりやすさがある。」（筆者取意）

言い換えれば、年収などという“一般的な尺度”というのは、分かりやすいけれども他の誰かであっても当てはまるもので、自分でない誰かと交換可能だというわけです。

しかし、人間が、これが「私」だと考えるときに、これらとはまったく違う尺度もあるのではないだろうかと河合先生はいいます。

たとえば、これが「私」だといえるのは、今ここに一人で登山をし、山小屋の前に佇（たたず）み、遙か山々の峰を眺めて、それだけで充分だという感覚です。

その時、「私」を支えてくれ、「私」を成り立たせている山や空気や、身体の疲労や、それらが渾然（こんぜん）一体となり、すべてが、“かけがえない”という尺度となるのでしょう。

私は、“かけがえない”という尺度ではないかと受けとめました。

●落とし穴

2019年に、大手電力会社が、国策の原子力発電事業を進める中で、地方行政の元助役と不明瞭な金品授受を行ったという報道がありました。時代劇のようですが、金品には、菓子箱に“小判”が入ったものもあったそうです。

先ほどの『中年クライシス』の言い方でいえば、自分を評価するのに、「金品」という誰にでも分かる尺度が、このやり取りには用いられた訳です。

しかし、この出来事は、自分を確認し、自分の役職の権力の大きさを誇示した時に、これだけの「金品」が動くのだという尺度は、分かりすいと同時に、大切なものを見誤る可能性もあると教えてくれているようにも思いました。なぜなら「金品」という尺度は、貨幣経済社会に生きる私たちにとって落とし穴にもなるからです。

誰にでも分かるこうした尺度に振り回されて、“かけがえない”という尺度を見失った姿を河合先生は、次のようにいいます。

「山に登り、峰を眺め、これが「私」だという感覚が分からない人は、山を見ている「私」を考えているようだが、その時見た山が、海抜何メートルだとか、交通費は幾らだったとか、そこは有名な山かとか、結局、その尺度は、『一般的な尺度』に頼っている。」（取意）

●テレビは救ってくれない

過日、ある家庭報恩講※1にお参りした時、近くに住む女性が車で、わざわざ、お参りに来ていらっしゃいました。その家に育った方で、大変ご法義※2なお母様に育てられ、ご縁があれば、“おみ法（のり）”に遇（あ）いにお参りされています。お勤めのあと、よもやま話に花が咲き、帰り際、子どもの頃の思い出話しをうかがいました。

テレビばかり見ていると、亡きお母様から、「いくら見ても、テレビは、救ってくれませんよ」と言われたというのです。もちろん、お内仏の如来さまに、お礼をしなさいよ、ということをこんな言葉で勧めてくれたのです。けだし名言ですね。

テレビは、色々な情報を与えてくれます。いわば、“一般的な尺度”としての情報を身につけるのに便利な道具です。

それに対して、お仏壇に参り、教えを学び、仏さまにお礼をする生活習慣は、私に、これこそが「私」だと感じられる心を育てて下さるのでないでしょうか。

“かけがえない”自分を育てて下さる仏さまの尺度（ものさし）を恵まれることを大切にしたいと思いました。

※1　宗祖親鸞聖人のご命日法座は、寺院だけでなく、門徒のお内仏（お仏壇の阿弥陀如来の御尊前）でも勤められてきました。
※2　法義は、もともと、仏法の教えや各宗派の教えのことをいいますが、「ご法義な」という使い方をするとき、浄土真宗のみ教えを大切にし、深い信心に生きるお姿をいうようになりました。今でも、ご法義な土地柄では、日常語として使われています。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「捨ててこそ～受けとれる世界」

●自分が見えると

ある政令指定都市の「地下鉄のホームに鏡を設置」したところ、飛び込み自殺者が減ったと本に書いてありました。見えていなかった自分の姿に注意が向いて、見えるようになると、自分の行いそのものを見つめるようになるということでしょうか。

ずいぶん前に、龍谷大学の先生から聞いた話です。日本の自殺の研究報告書に、大変興味深い記載があったそうです。

断崖絶壁から海に飛び降り、自殺をしようとした人が崖っぷちに立とうとすると、足元の土が崩れて、思わず、近くの木にしがみついて呟(つぶや)いたそうです。

「ああ、危なかった!」

冗談みたいですが、私たちも同じようなものを抱え、しがみついていないでしょうか。

●「自己への気づき」

先の本は、『ケーキの切れない非行少年たち』(宮口幸治著、新潮新書、2019年)です。

この本によれば、非行に至る少年たちは、認知力が不足しているにもかかわらず、それが社会の私たちに理解されていないことも、大きな問題だと提起しています。

ある意味で、社会の中で非行少年の行動が生まれる背景を分かりやすく示す啓発書ともいえるので、読んでいて教えられるところが多々あります。

「非行少年から学ぶ子どもの教育」の章には、「大きく変わり始める(非行)少年たち」、その「〝彼らが変わろうと思ったきっかけは何か?〟を知ることは、学校教育へのヒントにもなる」と示されます。

要約すると「きっかけ」とは「自己への気づき」であり、それが、今までになかった「自己評価の向上」につながると論証しています。

「自分の不適切なところ」を改善するには、「適切な自己評価」が原点で、悪いことをしてしまう「現実の自分に気づくこと」により、「自己洞察」、そして「葛藤」を持つことが必要とあります。

●捨てる～選ぶ

法然聖人(1133～1212)の『選択(せんじゃく)　本願念仏集』は、題名通り、念仏を選ぶことを勧め、念仏以外の様々な道を選びすてることが説かれます。これは、中国の唐の時代、善導大師(ぜんどうだいし)が念仏一行を選びとるという仏道を主張されたものに基づくものです。

平安時代中期の空也(くうや)上人(903～973)は、若くして出家され諸国を行脚しましたが、京都に移り乞食(こつじき)し、鉦(かね)を打ちならし人びとに念仏を勧めました。

当時、比叡山延暦寺の別院、三井寺に、千観(せんかん)(918～983)という高僧がいました。宮中のお内仏に奉仕する内供(ないぐ)という高い地位にありましたがある日、宮中から立派な輿(こし)に乗って三井寺への帰路、四条河原で、鉦を叩き、高声念仏して歩む、弊衣(へいい)の空也と邂逅(かいこう)します。

千観は輿から降りて、空也が来るのを待つと、そこで跪(ひざまず)き、私は念仏を日ごろ学んでいるがその極意が分からないと尋ねます。空也は、私の方こそ貴方のような高僧に学ばなければならないのに、教えるようなことはありませんと答え去ろうとします。その袖をつかみ、迫る千観に向かって空也は「いかにも身を捨ててこそ」と言うと袖を振り払い、念仏を称えつつ足早に去りました。

千観は立ちつくし、河原で衣を脱ぎ、供の者に自分は三井寺にはもう帰らない、この衣と袈裟を持って帰ってほしいと言うと独り西に進み、箕面(みのお)という所で庵(いおり)を結び、身を隠し、旅人の荷物を運ぶことで生計を立て、『極楽国弥陀和讃(ごくらくこくみだわさん)』という格調の高い讃歌を残しました。鴨長明の『発心集(ほっしんしゅう)』にある話です。

自分の姿に気づき、より所にならない「不適切」なものにしがみついていた姿を知るところに、本来の道理に適ったあり方が恵まれるのは、時代を超えているのでしょう。

その「葛藤」に気づかせてくれるのは、私が称えるお念仏でありつつ、それを如来さまの気づけよ、目覚めよ、身の程知れよという呼び声と聞かせて頂く生活習慣だと思い当たりました。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料·茶菓代として千円です)。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「おそれを超える～相手を思う心」

●「はけ口」

昨年（2019年）7月、新宿駅からタクシーを利用しました。運転手さんが、目の前の大型ビジョンに映るニュースを見上げて、「昨日はひどい事件でしたねぇ」と語りかけてきました。

「そうですねぇ、こういう事件（京都アニメーション放火）が続きますね」

「4日の目黒駅前の傘による失明事件」

「どちらも『見知らぬ人』の犯行と報道されてますね」

話は広がり、2018年の事件でしたが、この7月17日まで発表されていなかった岡山県警察学校の訓練中の傷害事件に触れ、上司の警官が部下の新任警官を傷つけたことも話し合いました。

「共通するのは、なにか、鬱憤（うっぷん）のはけ口がキレて、こんな事になるのでしょうかね」

●「暴力」が自己確認?

2019年7月の参院選の選挙期間中の15日、北海道で応援演説中の国会議員に「増税反対」などと声に出した聴衆二人を、警官数人がそれぞれ取り囲んだり、身体をつかんで後方へ連れていったりしたこと話題にしてから、私は自分の思いを語りました。

「日本は今、格差社会などと言われていますね。
そうした状況で、権力や経済力を持った立場の人の中には、自分より立場の弱い者に対して、パワハラなどの横暴や、経済的に弱い立場の者に対しての圧迫などが生まれていますね。
これは、弱い立場からすれば、自分を対等な人間として認めてもらえないという非肉体的な『いじめ』『暴力』を受けているのではないでしょうか。
弱い立場に立たされ、しわ寄せを受けた人たちは、今度は、自分を認めさせる『はけ口』として、自分よりもさらに社会の弱者の立場の人を見つけ、暴力を振るっているんじゃないでしょうか。
勿論、暴力を肯定するのではないですが、そんな社会が、今、弱い立場の人たちをやるせなくして、暴力という形で、相手や周りに自分を認めさせようとしているのかと思いますよ。」

運転手さんは、ウンウンと肯（うなず）きながら聞いてくれました。
実は、後になって調べると、心理学者のJ. T. テダスキが、

「人間は何らか恐怖を感じたり、危機的状況に遭遇したりすると、相手を攻撃したり強制的に従わせたりするなどの策を講じることで、自分の社会的地位や社会的アイデンティティーを主張する」

と「攻撃は対処行動の一つ」という説を主張していることを知りました。

●わが身を通して

ある大学教授から教えて頂いた、「仲間意識は、仲間はずれを作る」という言葉が今も心に残っています。

たとえば「仲良し」という言葉でも、それは「仲良し以外」と明確な線引きをします。しかし、「仲間意識」となると、仲間でない立場の人たち、つまり、「仲間はずれ」という関係性を生みます。

「子供を問題行動に向かわせないために～いじめに関する追跡調査と国際比較を踏まえて～」（国立教育政策研究所、2006年）には、国際比較を通すと日本は、「いじめ」の問題が起きたとき、中学生以降の子どもたちの言動には傍観者となる割合が高く、それは「大人」や「社会」の反映ではないかという報告がありました。こうした判断が、まったく正しいと言えるかどうかは分かりませんが、大変、気になる指摘だと思います。

お釈迦さまは、

「すべての者は暴力におびえる。すべての（生きもの）にとって生命は愛しい。己（おの）が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」『法句経』130偈

と説かれています。

私は、相手の立場に自分を置いて（つまり、お釈迦さまのお言葉で言えば、「己が身にひきくらべて」）、今回の事件を考えていただろうか、傍観者となっていなかったか、と問いを頂きました。

実はタクシーを降りる時、こんな言葉をかけてくれたのです。

「私の子は、東京でアニメーションの背景を描いているんです。給料は少ないけど、仕事に誇りを持ってるんです」と語ってくれた一言で、遠い所で起きた出来事を思いも掛けずとても近くに感じました。

この世の中は、私たちの意識が反映するといわれます。

あるツイートに、「強大な権力の圧力に「おかしい」と疑問を持つほうが「おかしい」と思わせられる世界。それが当たり前だったなら、今から変わっていってほしいです。」

とても、繊細で、考えさせられる言葉です。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「間に合ってよかった～相手を思う心」

●「この空の下」

私の連れ合いの体験です。地下鉄が発車寸前、降りる駅だと気がついたのか、男性客がバタバタと周囲の人や閉まるドアにぶつかり降りていきました。その人自身も、とても危ない様子でした。車内は、剣呑（けんのん）で重苦しい空気が流れました。

電車が動き出すと、幼稚園児が、大きな声で、「お母さん、あの人、間に合って良かったねえ」と言ったので、車内の空気は、穏やかで温かいものに包まれたようになりました。

「危ないなあ、早く降りる準備をすれば良いのに」、「ぶつかって乱暴だなあ」と連れ合いは相手を裁く気持ちでしたし、車内も同じ思いの人が多かったと思われます。

しかし、「間に合って良かったねえ」、と言う言葉に、「ああそうだったなあ」と自分の姿が映しだされ、自分の立場で相手を裁いていたと感じ気づかされた、というのです。

2019年7月7日、東京新聞1面の「この空の下」欄に、「就活の帰り道で」という女性記者の寸言がありました。六月の朝、東京メトロ地下鉄内で、目の前の女性が突然倒れます。「大丈夫ですか」と就活姿の女子学生が声をかけ、記者と共に次の駅で抱え、ホームに寝かせ声をかけ身体をさすり、「私たちがいますよ」「大丈夫ですよ」と前向きの言葉をかけました。

気づけば偶然居合わせた乗客たちも、輪唱のように女性に声をかけています。女性を駅員に托し電車に乗ると、「とっさに体が動いたの」、女子学生は朝一番の面接の帰りだといいます。「助けたり助けられたり。社会って結局、そういう場所なんですね」。人生の岐路の就職活動で不安も多いだろうに、晴れやかな表情です。「世の中、捨てたもんじゃないね。励まされたのはこちらの方」と記者は報じていました。

●ハイテク統治国家の未来

同日、東京新聞の書評欄に、中国が崩壊していく未来を民主化·民族問題をテーマに書く北京在住の政治SF小説家、王力雄（りきゆう）著·『セレモニー』が紹介されていました。

内容は、「独裁権力はテクノロジーを手にすることによって恒久的な体制になりうるか」という問題意識から展開します。近未来中国で、党の独裁、人民の監視が、コンピュータによるIDチップで可能になるという想定です。

書評では、「完璧と言える統治システムも、それが党や主席の権力強化といった個人的な思惑の上で築かれ、しかも実際に操作するのが小数の専門家である限り、ちょっとしたきっかけでシステム全体があらぬ方向に導かれ得るもろさをもつ」と論じ、「緻密かつ強大なシステムが持つもろさ」は、「完璧なゆえに」「死角を持ち得る」からこそ、「結局は人間の心が重要」で、「IT化が進むこのような時代だからこそ、むしろ他人への思いやり、自分の仕事を尊ぶ気持ちなど」が「ますます重要なのだ」と結びます。今の香港をめぐる状況を見ていると考えさせられます。

●相手を思う心を育てられる

ITの管理社会が進む中、書評子が指摘した「人間の心」「他人への思いやり」という論理を、身近な人びと（連れ合いや新聞記者）が、奇しくも、他者同士でひしめく人工的な地下鉄の車中の空間で実感しました。合理化で自分の便利さを追い、返って自ら人間性を失していくシステムは、人間が自分の都合を追い求める分別を持つかぎり、なくなりません。また、近未来にはさまざまな形に変化するでしょう。分別は無くせないけれど、それを超える道を示してきたのが仏教です。

善導大師は「平等に一切に施し同じく菩提心を発さん」という願いに生きよと示し、親鸞聖人は、念仏の信心は「願作仏心（がんさぶつしん）、度衆生心（どしゅじょうしん）」（自らを利し、他を利する）というように、自分が仏という人間を成就しようと願う心であり、他の衆生を真実に至らしめようという心だと明かされています。

私さえよければという心が見えてくることで、相手を思う心が恵まれることこそ、私の救いだったと、現代社会のシステムの中で改めて思います。先の記者は、「またどこかでね」とエールを送ったそうです。これも相手を思う心に恵まれた姿でしょう。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「昨日も今日、明日も今日～時間を考える」

●築地本願寺で理屈で考えた

何年か前の4月下旬、だいぶ陽が長くなった夕方、故·伊東忠太博士設計のインド風建築で有名な築地本願寺の本堂外陣の椅子に、しばらく、ただ座っている時間がありました。

築地の寺に生まれ（1957年）、育った私には、そこは遊び場であり、やがて、聞法求道の場にもなりました。朝の勤行の凛とした空気、昼の法話会の穏やかな時の流れ、夜の雅楽のお稽古の親密感など、さまざまな雰囲気の本堂に何十年も接してきました。

ところで、そのときは、天井脇の明かり取りの窓ガラスから差し込む夕陽が、なんとも豊かな広がりをもって、まるでシャワーのようにステンドガラスに降り注ぐのを見上げていました。

その時は、寄贈された当時（1970年）、東洋一といわれた西ドイツ製パイプオルガンで、誰かが仏教讃歌の練習しており、私はその響きに身を包まれていました。定期的に行われるコンサートとは違い、私以外、誰も参拝者のいない本堂で、このような巡り合わせになったことを、ゆっくりと味わいながら、自分はあと何回、このような光景に遇えるだろうか、と先ずは思いましたが、「いや違う、このいっとき以外、私の生きる時間はどこにもないのだ」と、日頃聞いている仏教の時間論を頭の中で確認したりしました。

そして、私がここにお参りし育てられたように、このお堂で先立つ多くの方がたが、み教えを聞き、念仏を称えることで、心が育てられ、新しい仏教的な人格が育てられたのだろうなと、短い時間、春先の軽い雰囲気の中、理屈の中で感銘していました。

●「おまけ」に負けた

同じ日の夕方、築地から地下鉄で三駅先の人形町駅近くにある老舗のせんべい店に行きました。塩や海苔や醤油など、みりんの甘さのない、さっぱりとした味です。バラで、何枚か選んでいると、1枚土間に落としてしまい、ビニール袋の中で割れてしまいました。

落とした1枚も一緒にして、選んだ商品を籠に入れてお勘定を頼むと、中年の女性店員が割れたせんべいを取り替えようとしました。「そのままでいい」と言うと、「いや、割れていない方がいいよ」と言いながら、新しい1枚と取り替え紙袋に入れてくれたのですが、最後に、割れたせんべいを、「はい、おまけ」と言って入れてくれました。

うーむ、その鮮やかな、というか、気っぷの良い応対に、それまで、さんざん店員さんと会話をしていたのに「ありがとう」以上の何も言えませんでした。そして、「負けるが勝ち」とは、こういうことだと一瞬にして深く肯きました。

「おまけ」ですから、先ずはお店が負けたんです。しかし結果として、完膚なきまでに負けたのは私の方です。いやそれも、せんべい店の店頭で、こんなに気持ちよいやり取りがあったのだということや、分別の損得という計らいを超えて「いのち」響き合い、一つに繋がり合う大きな実感という「おみやげ」まで貰っていたようです。

●人身受け難し、仏法聞き難し

私は、確かに、私を育んでいる大きな自然の恩恵によって、この身を先天的生得的に恵まれました。まさに、「人身受け難し、今すでに受く」（礼讃文）です。

しかし、パソコンも機械（ハード）だけでは使い物にならず、必ずプログラム（ソフト）が必要なように、人身（ハード）だけでは充分に納得できる生き方になりません。

「仏法聞き難し、今すでに聞く」というように、後天的学習的に、さまざまな因縁によって生かされているという道理の教え（ソフト）によって、私の「いのち」に気づかされ、育てられてきたのだと思いました。

仏教では、現在とは別に、過去や未来がどこかにあるのではなく、過去も、未来も、今においてしか存在しません。今、ここで、過去が、未来が受けとめられるのです。ある先生が「昨日も今日、明日も今日」と言われました。

今の私は今までの私の結果です。今の私がこれからの私を決定しています。いずれも、今から見てのみ、昨日も明日も、過去も未来もあるのです。ある日の夕方、そのような今、「現在を私たちは生きていると目ざめて生きていけよ」と教えてもらいました。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「トマトソース作り初体験～やらなきゃ分からん」

●トマトソースを作る

ラーメンは茹(ゆ)でたことがありますが、料理をしたことはほとんどありません。

そんな私が先日、新鮮なトマトを目にして、突然、トマトソースを作ってパスタを食べようと思いつきました。

昔なら、料理本でレシピを調べるところですが、今は何でもスマホで検索です。

見よう見まねで、タマネギ·ニンニクを刻み、オリーブオイルで炒め、十字に切り目を入れたトマトを湯むき、ザクザク切り、塩·コショウで味を調(ととの)え、10分ほど煮込んで出来上がりです。

パスタを固めに茹で、ソースをからめて（合掌）いただきました。包丁を手に、フライパンを握り、なるほど、料理も体験してみて初めて分かることばかりだと思いました。

ミジン切りとは、一体何ミリの大きさなのかと頭で考えていましたが、実際、包丁を手にすれば、こんなものかと肯(うなず)けます。煮込む時、トマトのどの部分が、ダマになってしまうか、これも体験で分かるものです。実際に自分でやらなきゃ分からないですね。

●過疎化問題と都市型化問題

親鸞聖人の教えは、まずは関東の「ゐなかのひとびと」に広まり、その後、本願寺ができ上がり、やがては、農漁村の人びとに支えられます。

その後、いくつかの社会構造の変化もありましたが、戦後数十年、農漁村から都市部への人口移動による過疎化問題が今、本願寺派（だけでなく、既成仏教）教団の大きな課題となっています。すると過疎で減った寺の数は、都市で増やせばよいという乱暴な論調さえ生まれかねません。ある意味で理屈、知識で問題を捉える姿です。

かつて、過疎化地域の人から、「自分の通った小学校がなくなるのは寂しいよね」という言葉を聞いたことがありました。しかし、都市型化が進み、住民人口の年齢が偏った地に育った私も、「自分の通った小学校は今、他の小学校と統合されて名前が変わったな」と思いました。お互い、自分の体験に留まっていると、色々な立場があることが見えてこないのだと教えられました。これも体験して分かることです。

●念仏を申す

協和発酵工業（現·協和発酵キリン）の会長だった、お念仏者、加藤辨三郎(べんさぶろう)（1899～1983）さんが、三十数年前、NHKテレビの「訪問インタビュー」（1982～85）に登場されました。

科学技術者でありながら、親鸞聖人について書物を出されている加藤さんが、大変、真摯な信心の行者であることにも話が及び、NHKのアナウンサーが、次のような問いかけをしました。

「加藤さんは、念仏を称えているそうですが、どういうご利益があるのですか」

すると加藤辨三郎さんは、あのギョロッとした眼をカッと開くと、尋ねます。

「あなたは、お念仏を称えていますか」
「いえ、称えていません」
「お念仏を称えていない人に、お話ししても何も意味がないでしょう」

とすげない返事をされます。

この部分は、今も私の記憶に鮮やかに残った、とても印象的なやり取りです。しかし、加藤氏は、和かな顔になり、

「お念仏はね、称えればこそ、仏さまに私の『いのち』が確かに育てられるのですよ」

とニッコリとこたえられました。

さて、多くのお念仏喜ぶ信者を育てた、博多の萬行寺、七里恒順(しち り ごうじゅん)（1835～1900）師は、人の心をとらえる多くの言葉を残しています。

念仏を称えることはまるで人力車を引くようなものだといいます。人力車は車輪も大きく、重いので、動かし始めるには大きな力が必要でなかなか動きません。しかし、一旦動いてしまえば、あとは、慣性の法則の通り、すいすいと進んでいきます。そのように、お念仏も最初はなかなか声に出して称えることはむずかしいけれども、心して称える生活を始めるならば、やがて、お念仏は出てくださるということでしょう。

頭で考えていても、前に進みません。包丁も握って、切ってみて、実際に体験することで、なるほど、こういうことだと私自身が、「いのち」を通してうなずけます。

お念仏も、まずは生活習慣の行として称えることです。

親鸞聖人は、「まづわが身の往生をおぼしめして、御念仏候ふべし」第二十五通とお念仏申すことをお勧めくださっています。改めて、私がお念仏申すことを通して、確かなアミダさまにお出遇いする教えだと肯かされます。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「畢竟依を帰命せよ～何を本当の拠り所とするのか」

「清浄光明ならびなし　遇斯光のゆゑなれば
一切の業繋も のぞこりぬ　畢竟依を帰命せよ」
親鸞聖人『和讃』より

●相手の身になる姿

混んだ電車の中。立っていた妊婦らしき女性に、高校生が「すぐに降りますので、どうぞ」と席を譲った。電車は次の駅に。ホームに出た高校生は、別の車両の扉から再び車内へ。女性に気を使わせまいとした、小さな、優しいうそだった（2020年4月1日付西日本新聞より、傍点筆者）。

疲弊感を増す報道が続く中、このような話に出遇うと心が穏やかになります。

相手の身になる言葉や行動に出遇うと、私たちの心は何かを感じたり、自分を見つめ直す心が生まれます。お互いの「いのち」の深い所には、相手の身になる姿に共鳴するようなナニカがあるようです。エイプリルフールの話題でも、そこに「相手の身になる」という仏教でいえば慈悲の姿を感じるからでしょうか。

●互いに受け入れ合う

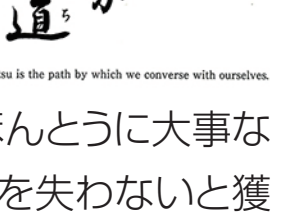
新型コロナウィルスの感染拡大が進むなか、注目されたのはドイツやフランスなどの救済政策で、フリーランサーや芸術家、個人業者への支援です。3月30日、ドイツ文化大臣は、「アーティストは今、必要不可欠なだけでなく、生命維持に必要な存在」と述べました。いざとなると文化の厚みが大臣の発言にあらわれる、と日本の識者が指摘していました。

一方、米国では、ウイルス検査の対応が遅れ、感染急増に繋がったことに、同20日、トランプ大統領は、「私には、まったく責任はない」。また、「中国の公表の遅れが世界的な感染拡大につながった」と述べ、感染防止より経済停滞を懸念する政策を一旦、立てました。

ところが、同日、ニューヨーク州のクオモ知事は、生活に不可欠な業種以外の営業を禁止し、在宅勤務を義務づけ、州内に不要不急の外出制限を発令し、「この決断の責任は私がすべてとります」「もし他人を非難したり、苦情を言いたい気持ちがあれば、どうぞ私を非難して下さい」「私以外にこの決定に責任ある人は誰もいません」「私の決断により、仕事がなくなる人が出てくることは承知の上です。それでも私は家から出て欲しくないのです」と語りました。カッコいいですね。「どちらがリーダーにふさわしいか」と米国各紙が報じています。

「人のいのちを犠牲にしてまで、経済を加速しろという国民はいない」「ニューヨークには、中国も、イタリアも含めて世界中から人が訪れる。それは、私たちの脆さであり、同時に強みです。たがいに受け入れ合うことが、私たちを人たらしめている。それが、ニューヨークだ」という州知事の言葉は、いろいろな意味で涙が出るほど感銘を受けます。

●ほんとうに大事なこと



しかしどれほど感銘を受けても、自分の価値観や感情で判断しているなら、結局、自分の都合に合わせて、これはいい悪いといっているだけと念仏を称えながら気づきました。つまり、称える念仏を如来さまの呼び声として聞かせていただくことです。（聞名念仏。カレンダー参照）

河合隼雄さんは、「人間ていうのは、ほんとうに大事なことがわかるときは、絶対に大事なものを失わないと獲得できないのではないかなと僕は思います。」（『こころの読書教室』新潮文庫）と示しています。

「大事なものを失う」とは、これこそ私の都合に合う、間違いないと、しがみついていた自分の思いこみに気づかされて、自我が崩壊する【南無と頭が下がる】ことであり、まったく同時に、「ほんとうに大事なこと」、本来の姿、真理に気づいて、新しい自己が育てられる【阿弥陀仏のあり方が開かれる】ことだと私は思い至りました。

厳しいことですが、どれだけ心に響く言葉でも、自己中心の私においては、仏さまのみ教え、真理に導かれなければ、私の判断はいずれも、まことならざる世俗の判断だということです。

親鸞聖人は「畢竟依を帰命せよ」と究極の拠り所を勧められ、そこに、「信心の智慧」が恵まれると明かされます。コロナウィルス影響下だからこそ、なにが本当の拠り所なのか、日ごろから、親鸞さまの教えを求め、念仏を生活習慣の行として、心を育て、お互い信心の智慧ある生き方を大切にしたいと思います。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「心が育つ~2つの見方」

●いただきまーす

新年度を迎え、子どもから大人まで、さまざまな期待や希望、そして、少しの不安や戸惑いをもって、新しい生活を始めた方もいらっしゃると思います。

幼い子どもの身体の成長はめざましいものがありますが、どんなに年齢を重ねても、私たちの心は、成長すると聞きました。そうです。身体も成長するように、心も成長すると教えてくれるのが、ほとけさまの教え、浄土真宗です。10年以上前に、次のようなお話しを聞きました。

ある大学の先生が、夜、ファミリーレストランに行くと、近くの席で幼い女の子が母親と食事を待っていました。注文した料理がくると、その子は小さな掌（てのひら）を合わせ、「いただきまーす」と言いました。

お坊さんでもある先生は、「このお母さんは若いけれど、よく子どもを躾けているなあ」と感心したそうですが、

「○○ちゃん、ここではお金払っているから、いただきますと言わなくていいの。でもね、おうちでは、おかあちゃんが作ってあげているんだから、いただきますと言うのよ」

とそのお母さんは教えたそうです。先生は、最近の若い世代はこう考えているのかな、親が恩を押しつけているようだなと感じたそうです。

●価値と意味

私たちには、「価値を知る」という見方と、「意味に気づく」という見方のふた通りがあると学んできました。別の表現をすれば、世間の見方と、宗教（仏教）の見方です。

先ず、価値を知るという見方は、役に立つか立たないかと、他のものと比べることで、自分にとって都合がいいかどうかという判断をもとにしています。

これは、人間が「よりよく生きる」ために必要なことです。この見方によって、農耕生産も、狩猟効率も、経済活動も、医療福祉も、そして、科学技術も、およそ、人間の生活に関わる営みが発展してきたといえるでしょう。

このように人間にとって、自分の「都合のよい」ことがかなうことを仏教では、「如意」、意の如くなる、思い通りになると表現しました。

しかし、人間にとっての幸せとはそれだけでしょうか。思い通りにならなければ、不幸なのかと仏教は問いかけてくれます。

●不如意に教えられる

お釈迦様は、思い通りにならない「不如意」なことを「生・老・病・死」と教えてくれました。四苦八苦の四苦のことで、生まれること、老いること、病むこと、死ぬことは、すべて思い通りにならないことです。もちろん、老人や病人を不幸だというのではありません。思い通りにならないことを通して大切なことに気づけよ、と教えているのです。

先の「意味に気づく」とは、老いや病など自分の身に起きたことを、私にとって他のものと比べることもできず、かけがえがないことだと気づくことだともいえます。

たとえ私に「不如意」、都合が悪くても、このことがあればこそ、今の自分があったのだと「意味に気づく」と、私が「本当に生きる」ことにならないかと教えます。

すると今までの生き方が私を作ってきたのだ、また、今の私は多くの恩により恵まれた私だと、気づかずにいたことを、申し訳ない、おかげさまだった、と心が育ち、自分の都合を超えて、自分のあるがままを受けとめる生き方さえ恵まれます。

都合を満たすことを幸せと感じる私に、都合を超えた出来事にも、よろこびや安堵や感謝を気づく生き方があると仏教は教えてきました。

さて、茶碗1杯のご飯は価値にすれば100円前後でしょうが、そのご飯に、かけがえのないお米のいのち、それによって生かされている私だ、という意味を発見したからこそ、頂くという礼法が生まれました。すると、いただきますという食前の言葉は、やがて、その言葉を口にする人自身の心を育て、価値だけでなく、尊い意味を見出す人生に導いてくれるのだと私は教えられています。

●「いただきます」

桜井俊彦先生の『やわらか子ども法話』（法藏館、2017年）から、「いただきます」という題の話をご紹介します。

スナックに行って、カウンターに座りました。つまみにエビシウマイを頼みました。前に立った20歳くらいの店の子に「食べていいよ」といいました。彼女は手を合わせて、「いただきまーす」といって食べはじめました。

「感心だね、いつも手を合わせて食べるの?」と尋ねると、「おばあちゃんがいつもこうして食べてたから自然と」と答えました。

石川県の保育園を営んでいたお寺の先生と園児の会話です。

「食事をいただく前に、手を合わせて『いただきます』といってから食べましょう」

「どうして?」

「食事の材料を運ぶ人や給食をつくる人がいるおかげで、こうして食事がいただけるんだよ」

「お母さんは、給食費、はらったっていってたよ」

「給食費は、運んだ人やつくった人にはらうお金だよ。お魚さんに、一円でもはらいましたか?　お米も野菜も、みんな生きているいのちを、私のために差しだしてくれているのです。だから、お礼をいってから食べましょう」

またあるとき、園児のお母さんから、

「うちの子は、食事の前にムニャムニャいって、なかなかたべはじめないのです」

と相談されました。次の日、その子のそばで何をいっているのか、耳をすませてみました。

「お魚さんごめんなさい、ニンジンさんごめんなさい」

と食材のひとつひとつにいっていたのです。そのとき、先生は、「○○ちゃん、手を合わせて『ナムアミダブツ』といって食べましょう。『ナムアミダブツ』のなかに、『ごめんなさい』も『ありがとう』も全部入っているんだよ」と話されたといういうことです。

食事のとき手を合わせる意味は、食べ物が私に届くまでに何人もの手をへてきていることへの感謝と、他の生き物のいのちをいただいて私のいのちが成り立っていることへの感謝のすがたです。

説明する人がいなくなったことと、お年寄りと一緒に住まなくなった家族の形が、心の教育にも大きく影響を与えているように思いました。（抄出）

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「食品廃棄～信心のしるし」

●恵方巻きの思い出

『ザ･ベストテン』（1978～89、TBS系列で放送）や『ニュースステーション』（1985～2004、テレビ朝日系列で放送）の司会者として知られ、東京育ちの久米宏さんが、最近、ラジオの番組で恵方巻きの話をしていました。

今から40年ほど前、関西の芸人が、

「節分には、みんなで同じ方向を向いて、しかも、黙って、海苔巻き鮨を食べるんや」

と言うと、久米さんをはじめ、関東の人たちは、

「ウソでしょ。そうやって、関西の人は、関東の人をだまそうとしても、だまされませんよ」

とやり取りしていたというのです。

たしかに、東京圏に育った私も「恵方巻き」という存在すら知りませんでした。それが、全国のスーパーやコンビニで販売され、大々的に宣伝された2003年頃から、あれよあれよという間に節分の食べ物として耳にするようになりました。ただ、私は今のところ、口にしたことはありません。

●食品の廃棄ロス問題

数年前から、この恵方巻きの大量廃棄問題がマスメディアで取り上げられています。

報道によると、2019年1月、農林水産省は、恵方巻きの販売が本格化する前に、スーパーやコンビニなどが加盟する食品小売業者の団体に、消費者の需要に見合った販売をすることで、廃棄ロスを減らすよう求める文書を通知しました。

そこでは、チラシに「もうやめにしよう」というキャッチコピーを掲げ、恵方巻きの大量廃棄問題を消費者に問いかけた、兵庫県内のスーパーが紹介されました。

こうした背景には、2015年9月、国連で、SDGs（持続可能な開発目標）が採択されたことも大きな関係があります。

17ある目標のうち、12番目の「つくる責任　つかう責任」で、

「2030年までに小売･消費レベルの食品の廃棄ロスを半減させる」

という数値目標が設定されたのです。

これらの問題提起は、現代社会の経済や流通の抱えたる問題点を深いところで考えさせ、私たちに、様々な警鐘を鳴らすものだと思います。しかし、問題は、そうした客観的な数値を抑えるだけに留まらないように感じられます。

●『芸藩通志』に私を問う

江戸時代、『芸藩通志（げいはんつうし）』という、安芸の国（現･広島県西部）の郷土史的性格を持つ書物が1825年に編纂されました。和綴じで159巻もあり、地域ごとの産物や文化的傾向などが記されています。

興味深いのは、安芸門徒といわれる浄土真宗の熱心な信者には、他の藩に比べて、次のような特徴があるというのです。

一、神社で、ご祈祷をしない。神棚をまつらない。
二、その結果、医師や薬屋の数が多い。
三、間引き（中絶）が少なく、人口増加が多い。
四、その結果、出稼ぎする文化が生まれた。
五、精進の日を忠実に守った。（ご命日になまぐさ物を食べない）
六、その結果、後々まで養蚕業が振るわなかった。（生きた蚕を殺生することを嫌がった）

「今日は親の命日だから、お精進で過ごしましょう」という言葉は、ほとんど日常から消えて死語になり、説明しないと、伝わらない文化になってきています。

ところが、安芸門徒は毎月十六日、聖人のご命日をお精進で過ごすので、魚や肉を買わなかった、それで、店を開いても売れないので、魚屋と肉屋が休みになった、すると、市場も仕入れに来る人がいないから休みにしたというのです。

それが、広島市や呉市などに、「おたんやのいちどまり」という言葉で伝わったそうです。「おたんや」とは、ご命日のお逮夜（たいや）参りのことです。「いちどまり」とは、市場がお休みになるという意味です。これは戦後まで続いていたそうです。

誰かが押しつけたのではなく、一人ひとりの生活に心（信心）が育つと、何らかの形（しるし）で反映するのです。

食品廃棄をしてはいけないと批判的に論ずるだけでなく、心を育てることの大切さにも心を向けたいと、私は思いました。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「仕掛け学～相手の立場」

●分かっちゃいるけど

映画『ローマの休日』（1953年、アメリカ映画）に「真実の口」という神の顔をかたどった彫刻が出てきます。偽りの心を持つ者が手を入れると噛みきられるという伝説で紹介されています。

これを逆手にとった機械に感心しました。

同じかっこうをした発泡スチロール製の「真実の口」を、ある病院の玄関壁の前に置き、その口の裏側に消毒液噴霧の機械を置きました。口に手を入れるとセンサーが反応してアルコールの消毒液が出てくる仕掛けです。

さあ、そうすると、それまで800人ぐらいが見ても、使うのは4、5人だったのが、この「真実の口」を置くと、面白がって、使用率が2割位まで上がったそうです。

多くの人は、手を洗うだけでなく、アルコール消毒もした方がいいと、頭や理屈では「分かっちゃいるけど」、実際は行動をしていないのです。ところが、そんな人たちを動かしたのが「真実の口」でした。

今は、新型コロナウイルス感染の心配から、言われなくともアルコール消毒をするようになっていますね。

●仕掛け学

実は、このアイディアは、『仕掛け学』という研究をしている松村真宏氏（大阪大学大学院教授）が考案しました。

なぜ、消毒薬を使わなかった人が、使うようになったのか、先生は、次のように分析しています。

「人は、ああしろ、こうしろと指図しても簡単に人の行動は変わりません。
それで結果的に本来の目的が達成されるように言い換え、別の見方でものを伝えてあげるといいだろうと思っています。
それは考えて行動する前に〝ついやってしまう〟というところを重視しています。
例えば、たばこのポイ捨てをしてはいけないと知っているのに、やっている人がいます。
『たばこのポイ捨て禁止』と書く替わりに、吸い殻入れを2つ置いて『阪神と巨人どちらが好きですか?』と書いておくと、応援するチームに入れたくなるので、それで結果的にポイ捨ても減るということです。」

そういえば数年前から公共の男性トイレの小用便器の内側中心部分に、弓矢の的（まと）のシールが貼られているのも、この仕掛け学をもとにしていると分かりました。

頼まれたわけではないけれど、ついやってしまうのが「仕掛け」という訳です。

●相手の立場

年齢の幅を超えて愛された劇作家･井上ひさしさんに、たいへん有名な言葉があります。

むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、ゆかいなことをいっそうゆかいに

考えさせられる言葉です。そういえば、親鸞聖人の『一念多念文意（いちねんたねんもんい）』や『唯信抄文意（ゆいしんしょうもんい）』などには、その末尾に、次の言葉があります。

ゐなかのひとびとの、文字のこころもしらず、あさましき愚痴きはまりなきゆゑに、やすくこころえさせんとて、おなじことを、とりかへしとりかへし書きつけたり。
こころあらんひとは、をかしくおもふべし、あざけりをなすべし。
しかれども、ひとのそしりをかへりみず、ひとすぢに愚かなるひとびとを、こころえやすからんとてしるせるなり。

なかなか行動に移せないでいる人びとを、なんとかして、教えに遇うところまでみちびいていきたいという温かい心が、行間からにじみ出ているように思います。

相手のことを本当に思うとき、いつの間にか、相手の立場に立って、本当の意味でよりそう生き方が生まれるのですね。

このようなあり方に、気づかぬうちに導かれ、私の口からお念仏が称えられるようになったのだと改めて教えられました。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「相手を思う〜一如の教え」

●夢に想う

スイスの精神医学者として著名な、C. G. ユングは、自身を「魂の医者」とも呼んだそうです。
『ユングの生涯』（河合隼雄著、1978）によれば、彼は9歳の頃、次のような「想像の遊び」をしていたそうです。
好きな石の上に座り、「私はこの石の上に坐って、石は私の下にある」と考えながら、石の方でも、「私はここに横たわり、彼（幼いユング）は私の上にのっている」と考えることもできる。
そうすると、「私は石の上に坐っている人なのか、それとも、私が石で彼（ユング）が坐っているのか」分からなくなり、「一体、誰が何なのか」全くはっきりしなくなり、そのような感覚、謎に魅せられて何時間も石の上に坐っていることもあったといいます。
同著には、まるで、中国の「荘子の胡蝶（こちょう）の夢を思わせる」ようだとコメントがありました（胡蝶の夢:荘子は、蝶になっている夢を見ていて目が醒めたが、自分が蝶になった夢をみていたのか、それとも今の自分は蝶が見ている夢なのかという逸話）。
私がいて相手がある、と考えます。しかしそれは、相手がいてくれるからこそ、私が成り立つということでもあります。

●マインドする

この本の著者、河合隼雄氏の『河合隼雄自伝〜未来への記憶』（同著、2015）に、私にとって、今の話と無関係とは思えない逸話がありました。
アメリカに留学していた若き日の河合氏が、精神医学の研究を進めるために、自分自身が被験者として精神分析を受けることになります。
当時、精神分析の料金が1回、25ドルもかかりましたが、先輩医師は経済的に余裕のない河合氏に、

「分析料は1ドルでいい、アイドントマインド（何とも思ってない）」

といいます。
河合氏は、最初それを拒みます。しかし、やがてその申し出を受けとめながらも、心の中で葛藤を起こして、

「あなたは、マインドしないが、ぼくは永久にマインドする」

と言うと、先輩は喜び、

「それならマインドしたらよろしい、でも料金は1ドルにしよう」

と言います。
河合氏は、

「ああ、ここであなたがぼくにしてくれたことをぼくはどこかでするだろう。それはあなたに対して払うんじゃないけど、あなたのしたことの意味をくんで行うのです」

と答え、そして、その後の人生で、自分はそれをしているのだと書いていました。

●ご恩に報いる〜クリタ・ジュニャ

一月は、親鸞聖人の御正忌報恩講（ごしょうき ほうおんこう）です。
阿弥陀如来のご本願が勧めてくださる、お念仏の信心を私たちに示してくださった親鸞聖人の生き方を思い、それに報いる法要です。
聖人は、信心を浄土の大菩提心と示され、それを願作仏心（がんさぶっしん）、度衆生心（どしゅじょうしん）と明かします。
そして、度衆生心を、「よろづの有情を仏に作（な）さんと思う心」と示されています。あらゆる人びとを真実に目ざめさせようという心といえるでしょうか。
私たちは、自分と相手を分別し分けて考える時、自分さえよければいいという行いにつながります。
しかし、どこかで、私と相手は、分けられない、相手のしてくれたことによって自分が成り立っていると思う生き方が育つと、無分別の生き方、つまり相手を自分のように大切に思う、一つ如し、一如の生き方につながるように思います。
遠く遥かに、親鸞聖人が教えてくださった生き方、つまり、信心をよろこぶところに報恩のおもいが恵まれます。
恩とは、インドの言葉、クリタ・ジュニャともいわれます。
私のために仏さまが為されたこと（クリタ）を知る（ジュニャ）ならば、当たり前の道理として、今度は他者の為に、この私がそれをしていこうという生き方が恵まれます。
一如の心を恵まれて、分別している自分を知らされると、大切なことは何かと思い巡らす心が育てられます。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。